

引用節のタイプ分けに関わる文法現象

阿 部 忍

0. はじめに

本稿では引用の助詞「と」を伴って現れる引用節の統語的性質について考察する。

特に引用節のタイプ分けに関わる種々の統語論的文法現象を指摘し、引用節の記述のための枠組み作りに資することとしたい。本稿の構成を簡単に述べておく。1でまず引用節のタイプ分けについて論じ、2～5でそのタイプ分けに関わる幾つかの文法現象(代用形式との置換、否定、使役化、名詞化)を記述していく。6はまとめである。

1. 引用節の主なタイプ：「補足的」「付加的」「展開的」

従来の研究を見ると、引用節には大きく分けて補足的なもの、付加的なもの、展開的のものがあるという事実はすでに気付かれている。^{注1)}すなわち、次の(1)の下線部は補足的な引用節であり、(2)の下線部は付加的な引用節である。^{注2)}

(1) 公太は紅茶が好きだと言った。

(2) 公太はこうしてはいられないと慌てて出ていった。

(1)に含まれる引用節「紅茶が好きだ」は動詞「言った」に要求される要素(項)である。つまり動詞の意味を補足するものであり、その意味で補足的引用節と呼ぶことができる。そして、(1)から引用節を削除した(3)のような文は非文法的になる。^{注3)}

(3)*公太は言った。

このような補足的引用節を取る動詞は、「言う、告げる、伝える、主張する、宣言する、思う、考える、みる、信じる、断定する、命令する、要求する、提案する」などの認識や伝達などにかかわる動詞である。本稿ではこれらの動詞を「認識・伝達動詞」と呼んでおく。

一方、(2)に含まれる引用節「こうしてはいられないと」は動詞「出ていった」に要求されている要素ではない。従って(2)から引用節を削除して(4)のような文を作っても、それは文法的な文となる。

(4) 公太は慌てて出ていった。

つまり(2)に含まれる引用節は動詞句「慌てて出ていった」を修飾するために付加されたものであり、その意味で付加的引用節と呼ぶことができる。

付加的引用節は主文の動詞に要求されるわけではないので、当然のことながら、付加的引用節の現れる文においてどのような動詞が主文の述語として現れるかを予測することはほとんどできない。^{注4)}

ここまでは半ば常識のように考えられていることであろう。しかしながら、ここで強調しておきたいのは、この補足的／付加的という二分法ではうまく説明できないようなタイプの引用節が存在するということである。すなわち補足的と付加的、この2つのタイプの中間に位置するような引用節がある。(5)、(6)の下線部がそうである。

(5) 公太は紅茶よりコーヒーのほうが好きだと嘘をついた。

(6) 公太は日本には紅茶の文化が根付いていないと嘆いた。

これら(5)、(6)の文から引用節を削除すると、(7)、(8)ができるが、これらの文の容認性は低くない。その点で(5)、(6)に含まれる引用節は補足的引用節と一線を画する。

(7) 公太は嘘をついた。

(8) 公太は嘆いた。

しかし、(7)、(8)は意味的には不完全である。すなわち(7)では「嘘」がどんな「嘘」であるのかについての情報が不足しているし、(8)では「嘆き」がどんな「嘆き」であるのかについての情報が不足している。そしてこの不完全さは(4)の完全さとは一線を画する。(4)の動詞「出ていく」は主語「公太」さえ文中に存在すれば最小限の意味的な完全さを維持することができるからである。

つまり、(5)、(6)に含まれる引用節は、削除されると、文法的ではあるが意味的に不完全であるような文((7)、(8))ができてしまうという点で、典型的な補足的引用節と典型的な付加的引用節の中間に位置するものと言える。

このようなタイプの引用節を本稿では「展開的引用節」と仮に名付けておく。このタイプの引用節は、主文の動詞が意味する感情や態度の内容をいわば展開するかたちになっているからである。例えば、(5)の文においては、引用節「紅茶よりコーヒーのほうが好きだと」は動詞「嘘をついた」の内容を表している。

展開的引用節と共に現れる動詞(句)は「嘆く、喜ぶ、頷く、ためらう、泣き叫ぶ、感心する、決心する、安心する、嘘をつく、歓声をあげる」などの感情や態度を意味するものである。本稿ではこれらの動詞を「感情・態度動詞」と呼んでおく。

以上、補足的引用節、付加的引用節、展開的引用節、という3つのタイプを区別した。ここでそれぞれの特徴をまとめておく。

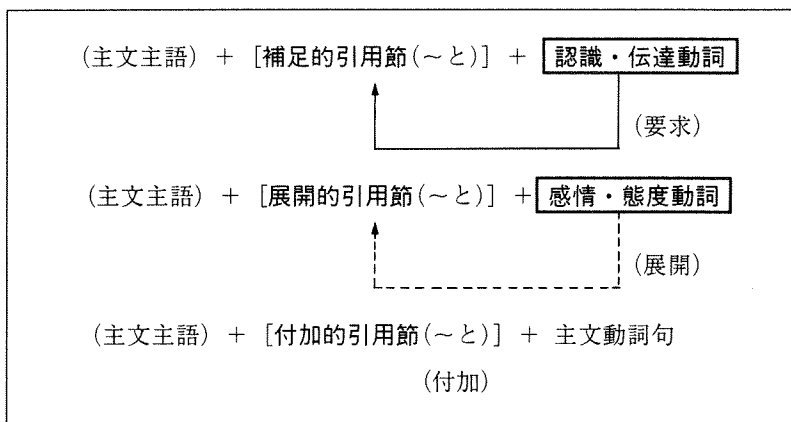
補足的引用節：主文の述語に要求される項である。削除することはできない。

展開的引用節：主文の述語の意味を展開する。削除できるが、そうすると意味的には不完全になる。

付加的引用節：主文の述語句を修飾する。全く問題なく削除できる。

展開的引用節は前述した点から補足的引用節と付加的引用節の中間に

位置するといえる。それぞれのタイプの引用節を含む文の基本的な構造を簡単に図示すると次のようになるだろう。



このように引用節を「補足的」「付加的」「展開的」と一応分類した上で、以下では、この分類に係わる統語論的な現象を幾つか見ていく。

2. 引用節と代用形式「そう」

まずここでは、引用節と代用形式「そう」との置換可能性を見てみる。

下の文(9)(10)(11)は補足的引用節を、(12)(13)(14)は展開的引用節を、(15)(16)(17)は付加的引用節をそれぞれ含んでいる。それぞれの(a)文は通常の、引用内容に助詞「と」が付いたかたちの引用節が現れた文である。また、それぞれの(b)文は、引用節部分を代用形式「そう」で置き換えた文である。

(9) a. ありさは今回のドラマはとても勉強になったと言った。

b. ありさはそう言った。

(10) a. D球団側は調査の結果不正が確認できなかったと主張している。

b. D球団側はそう主張している。

- (11) a. 多くの専門家はこのまましばらくは地球温暖化の傾向が
続くとみる。
b. 多くの専門家はそうみる。
- (12) a. 由紀子は家事を手伝ってくれる人が増えて良かったと喜んだ。
b. (?)由紀子はそう喜んだ。
- (13) a. 太郎はその論文がよく書けていると感心していた。
b. (?)太郎はそう感心していた。
- (14) a. 男たちは野村監督がやってくれたと歓声をあげた。
b. (?)男たちはそう歓声をあげた。
- (15) a. 女はさよならと手を振った。
b. *女はそう手を振った。
- (16) a. 母親は「今日はお昼前に迎えにいくからね」と娘を送り出した。
b. *母親はそう娘を送り出した。
- (17) a. 勉強しなきゃ、と彼はボロボロの六法全書を取り出して
読み始めた。
b. *そう彼はボロボロの六法全書を取り出して読み始めた。

(9)～(11)の各々の(b)文の容認可能性から分かるように、補足的引用節は原則として代用形式「そう」と置換可能である。

また、展開的引用節の場合、(12)～(14)の各(b)文は補足節の場合に比べれば容認性がやや落ちるかもしれないが、容認できないというほどではない。

一方、(15)～(17)の各(b)文の容認不可能性から見て取れるように、付加的引用節の場合は「そう」に置き換えると非文法的になってしまう。

ところで、(15)～(17)の(a)文の内容をどうしても代用形式を用いて表現しようとするならば、「そう」の変わりに「そう言って」「そう思っ

て」などを用いなければならないだろう。例えば(18)の各文(a~c)のようである。^{注5)}

- (18) a. 女はそう言って手を振った。
 b. 母親はそう言って娘を送り出した。
 c. そう言って彼はボロボロの六法全書を取り出して読み始めた。

興味深いことに、「そう言って」「そう思って」といった表現を「そう」の代わりに用いた場合、付加的引用節の場合だけでなく展開的引用節の場合も容認可能な文ができるが、逆に補足的引用節の場合は容認不可能な文ができてしまう。次の(19)の各文(a~c)が展開的引用節の場合であり、(20)の各文(a~c)が補足的引用節の場合である。

- (19) a. 由紀子はそう言って喜んだ。
 b. 太郎はそう言って感心していた。
 c. 男たちはそう言って歓声をあげた。
 cf. (12)~(14)

- (20) a. *ありさはそう言って言った。
 b. *D球団側はそう言って主張している。
 c. *多くの専門家はそう思ってみる。
 cf. (9)~(11)

(20)の各文(a~c)は非文法的であるばかりでなく、意味的にも冗長(redundant)である。

以上の観察を表にまとめてみよう。

	補足的引用節	展開的引用節	付加的引用節
「そう」との置換	○	○	×
「そう言って」etc.との置換	×	○	○

この結果から、補足的引用節と付加的引用節が対極的な関係にあり、展開的引用節はその中間に位置づけられるということが、代用形式との置換という文法現象の面からもしっかり示されたといつてよいであろう。

3. 引用節と否定

次にここでは、引用節と否定との関わりかたを見る。

次の(21)～(23)は補足的引用節を、(24)～(26)は展開的引用節を、(27)～(29)は付加的引用節をそれぞれ含んでいる。それぞれの(a)文は主文の動詞が肯定形であり、(b)文は主文の動詞を否定形(「ナイ形」)にしたものである。

- (21) a. 満代はイチロー選手が大リーグへ行くべきだと主張している。
b. 満代はイチロー選手が大リーグへ行くべきだと(は)主張していない。
- (22) a. 隆はその会社が一番自分に適していると考えた。
b. 隆はその会社が一番自分に適していると(は)考えなかった。
- (23) a. 警察は前主任が毒物混入事件の犯人だと断定した。
b. 警察は前主任が毒物混入事件の犯人だと(は)断定しなかった。
- (24) a. 花子は誰に話しかけようかとためらった。
b. *花子は誰に話しかけようかと(は)ためらわなかった。
- (25) a. 子供たちはお腹が空いたと泣き叫んだ。
b. *子供たちはお腹が空いたと(は)泣き叫ばなかった。
- (26) a. ユタカはその通りだとうなずいた。
b. *ユタカはその通りだと(は)うなずかなかった。

- (27) a. 美美子は、また来てくれたのね、と笑みを浮かべた。
 b. *美美子は、また来てくれたのね、と(は)笑みを浮かべなかった。
- (28) a. 負けてたまるか、とシノブは右手を握りしめた。
 b. *負けてたまるか、と(は)シノブは右手を握りしめなかった。
- (29) a. ハルキは、誰だろう、と窓をあけた。
 b. *ハルキは、誰だろう、と(は)窓をあけなかった。

(21)～(23)の各(b)文の容認性から、一般に補足的引用節を含む文は否定できる(多くの場合引用節に助詞「は」を付加して)ことが分かる。それに対して、展開的引用節と付加的引用節の場合、(24)～(29)の各(b)文の容認不可能性から、主文の動詞を否定の形にするだけで文自体を否定することはできないということが分かる。展開的引用節や付加的引用節を含む文をあえて否定するときは、(30)や(31)のように、「のではない」「わけではない」といった形にしなければならない。^{注6)}

(30) 花子は誰に話しかけようかとためらったのではない。

(31) 美美子は、また来てくれたのね、と笑みを浮かべたわけではない。

この3節における観察の結果、補足的引用節が特別の位置を占めること、換言すれば展開的引用節と付加的引用節の共通性が明らかになったといえよう。

4. 引用節と使役化

ここでは、引用節を含む文を使役化した時にどういった現象が起こるかについて見てみる。まず、次の(32)～(34)の(a)文のような補足的引用節を含む文を、「させる」をつけて使役化すると、各々(b)文のようになるが、そこでは被使役者(波線部)は全て二格でマークされる。被使役

者をヲ格でマークした各(c)文は全て非文法的になる。^{注7)}

- (32) a. 子供たちはサンタが本当にいると信じた。
b. 大人たちは子供たちにサンタが本当にいると信じさせた。
c. *大人たちは子供たちをサンタが本当にいると信じさせた。
- (33) a. 公太はチャットの相手が女性だと思った。
b. 友人たちは公太にチャットの相手が女性だと思わせた。
c. *友人たちは公太をチャットの相手が女性だと思わせた。
- (34) a. その政治家は憲法を改正すべきだと言った。
b. 黒幕はその政治家に憲法を改正すべきだと言わせた。
c. *黒幕はその政治家を憲法を改正すべきだと言わせた。

ここでは、補足的引用節を含む文を使役化した場合、被使役者をヲ格ではマークできず、必ずニ格でマークしなければならないという点が重要である。

次に、展開的引用節を含む(35)～(37)の各(a)文を使役化して、被使役者のマークがニ格である(b)文とそのマークがヲ格である(c)文とをそれぞれ作ってみる。すると、(35b) (36b)のように被使役者のマークがニ格だと非文法的になるケースが大半だが、(37c)のようにヲ格でマークすると非文法的になるケースもあることが分かる。

- (35) a. 母親はいつになったら大人になるのやらと嘆いた。
b. *ぐうたら息子は母親にいつになったら大人になるのやらと嘆かせた。
c. ぐうたら息子は母親をいつになったら大人になるのやらと嘆かせた。
- (36) a. 千里はコンビニに行こうと決心した。
b. *空腹が千里にコンビニに行こうと決心させた。
c. 空腹が千里をコンビニに行こうと決心させた。

(37) a. 弘樹はテストで一番だったと嘘をついた。

b. 親からのプレッシャーが弘樹にテストで一番だったと嘘をつかせた。

c. *親からのプレッシャーが弘樹をテストで一番だったと嘘をつかせた。

(35c) (36c) のように被使役者(「母親」「千里」)がヲ格でマークされなければならないのは、展開的引用節を含む文を使役化すると、いわゆる「原因の使役文」になるからであろう。すなわち、(35c)の「ぐうたら息子」や(36c)の「空腹」は、それぞれの文が表す出来事の原因であると解釈される。

実は(37b)も原因の使役文であるという点では同じである。ではなぜ被使役者「弘樹」がヲ格ではなく二格でマークされるかという、すでに「嘘を」というヲ格があるからである。つまり、同一動詞句内に二つ以上のヲ格があってはいけないという、いわゆる「二重ヲ格制約」に対する違反を回避するため、「弘樹」は二格でマークされるより他ないのである。^{注8)}

では付加的引用節を含む文を使役化した場合はどうなるであろうか。次の(38) (39) (40)の各(a)文が付加的引用節を含む文で、(b)文はそれぞれの(a)文を使役化し、被使役者を二格でマークしたもの、(c)文は被使役者をヲ格でマークしたものである。

(38) a. 男は何かの手がかりにでもと、話し始めた。

b. *私は男に何かの手がかりにでもと、話し始めさせた。

c. *私は男を何かの手がかりにでもと、話し始めさせた。

(39) a. 探偵は、そんなはずはないと葉巻に火をつけた。

b. *その証言は、探偵に、そんなはずはないと、葉巻に火をつけさせた。

c. *その証言は、探偵を、そんなはずはないと、葉巻に火をつけさせた。

(40) a. もう遅いわと、女は帰ろうとした。

b. *重苦しい空気が、もう遅いわと、女に帰ろうとさせた。

c. *重苦しい空気が、もう遅いわと、女を帰ろうとさせた。

(38)～(40)のそれぞれの(b)文と(c)文はいずれも非文法的な文である。^{注9)}つまり付加的引用節の場合、それを含む文の使役化はできないということになる。

以上の、引用節と使役化という点からの観察をまとめると、次のようになる。

- I. 補足的引用節と展開的引用節は、それを含む文を使役化できるという点で共通点を持つ。換言すれば、付加的引用節は異質である。
- II. 補足的引用節は、それを含む文を使役化する場合、被使役者をヲ格ではマークできず、必ずニ格でマークしなければならない。
- III. 展開的引用節は、それを含む文を使役化する場合、原則として被使役者はヲ格でマークしなければならないが、元の文の動詞句内にすでにヲ格名詞句が含まれている場合に限り、被使役者はニ格でマークする。

5. 引用節と名詞化

この節では、引用節を受ける動詞が名詞化できる場合に、引用節自体がどういった文法的ふるまいを示すかについて観察する。^{注10)}

まず補足的引用節の場合を考えてみよう。(41a)は補足的引用節「政府は信用できないと」を含む文である。(41b)は(41a)の動詞「思う(思っている)」を「思い」と名詞化し、それに伴って引用節も助詞「と」が「という／との」に変わり、いわゆる内容節になっている。そしてこの(41b)は文法的な句であるといえる。

(41) a. 国民は政府は信用できないと思っている。

b. 国民の政府は信用できないとの／という思い

次の(42b) (43b) も、同様に補足的引用節の名詞化におけるふるまいを示す例である。

(42) a. メーカー側はその製品に欠陥があると認識していた。

b. メーカー側のその製品に欠陥があるとの／という認識

(43) a. 組合側はボーナスを上げろと主張した。

b. 組合側のボーナスを上げろとの／という主張

次に展開的引用節の場合を見てみよう。(44)～(47)の各々の(a)文は展開的引用節を含む文であり、各々の(b)文(句)は上と同様の名詞化をかけた例である。

(44) a. 強盗は助けてくれと絶叫した。

b. 強盗の助けてくれという絶叫

(45) a. 鉄郎はこんなこととしてよいのかとためらった。

b. 鉄郎のこんなこととしてよいのかというためらい

(46) a. 専務は人事はまだ固まっていないと嘘をついた

b. 専務の人事はまだ固まっていないとの／という嘘

(44)～(46)の各(b)文は全て文法的であり、展開的引用節も補足的引用節と同様、問題なく名詞化できるということが分かる。^{注11)}

では付加的引用節の場合はどうか。(47)～(49)の各(a)文は付加的引用節を含む文であり、各(b)文(句)はここでいう名詞化を試みたものである。

(47) a. 泉はもう別れるかもしれない、と笑った。

b. *泉のもう別れるかもしれないとの／という笑い

(48) a. ケンは、まだいける、とハンドルを操作した。

b. *ケンの、まだいける、との／というハンドル(の)操作

(49) a. ひさしぶり、と悪魔が出現した。

b. *ひさしぶり、との／という悪魔の出現

(47)～(49)の各(b)文(句)が非文法的であることから、名詞化に関しても、付加的引用節が異質であるということ(補足的引用節と展開的引用節が共通点を持つこと)が分かる。

6. おわりに

以上2～5節で見たように、補足的・展開的・付加的という引用節の3つのタイプは、幾つもの文法現象(代用形式との置換、否定、使役化、名詞化)に関わっている。

ここで再び強調しておきたいのは、この3つのタイプの相互関係である。すなわち、補足的引用節と付加的引用節はその性質において対極にあり、展開的引用節は両者の中間に位置づけられるという関係である。なぜなら、2～5節で見た現象は全て、

〔補足的引用節と展開的引用節〕対〔付加的引用節〕

あるいは

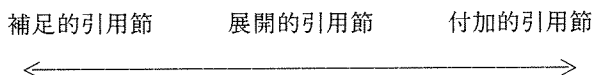
〔補足的引用節〕対〔展開的引用節と付加的引用節〕

という対立関係を示しているのであって、

「補足的引用節と付加的引用節」対〔展開的引用節〕

という対立関係を示す現象は無いからである。

したがって、この3つのタイプ間の関係は簡単な図で示すと次のようになるう。



本稿では議論を明確にするために、それぞれのタイプの典型と考えられる例をあえて用いたが、実際の一次資料にはどのタイプに入るのか迷うような引用節の例も出てこよう。しかし上の図式から予測されること

は、「明らかに展開的引用節ではなく、補足的引用節か付加的引用節のどちらに入るか迷う」といった例は出てこないということである。

この3つのタイプの共通点と相違点が顕現するように見える文法現象はまだ他にも多くあるが、それについてはまた稿を改めて論じることとする。

附記：本稿は1998年夏の日本語記述文法研究会での発表が元になっている。研究会メンバーの皆様からは貴重なご意見を賜った。ここに感謝の意を表させて頂く次第である。もちろん、至らぬ点は全て筆者の責任である。

注：

- 1) 例えば、藤田保幸1986では引用節(藤田の術語で「文中引用句」)Aとそれを受ける述部Pの意味関係のあり方から、 α 類(PがAと共存する動作・状態を表す)と β 類(PがAと事実上等しい動作を表す)を区別している。ここでいう補足的引用節は藤田の β 類に、付加的引用節は α 類に概ね対応すると言えるだろう。しかし後に見るように、本稿では「展開的引用節」という類を立てる。
- 2) ここで言う補足的／付加的の区別は、いわゆる生成文法における“complement”と“adjunct”の区別と等しいと、とりあえずここでは考えておいて良い。
- 3) もちろん、(3)の文の前後の文脈に引用節をおいた次の(a)、(b)、(c)のような場合、容認可能となる。
 - (a)「紅茶が好きなんだ」。公太は言った。
 - (b) 公太は言った。「紅茶が好きなんだ」。
 - (c) 愛していると公太が言うとは誰も考えなかった。しかし公太は言った。しかし、(3)の文が単独で現れる場合には非文法的であるという事実には変わりはない。
- 4) もっとも、付加的引用節の後には無意志動詞が現れにくい、といったようなネガティブな記述なら多少はできるかもしれない。

- 5) 付加的引用節がいつでも「そう言って」「そう思って」などと置き換えられるというわけではない。
- 6) 但し、否定の焦点が引用節におかれるような解釈を強制するような文脈を作れば、(24)～(29)の各(b)文も容認性が上がることがあるようである。例えば、(24b)に文を付け加えて次の文連鎖(d)のようにした場合である。

(d)(?)花子は誰に話しかけようかと(は)ためらわなかった。そうではなく、何を話題にしようかとためらったのだ。

しかし、ここでの議論ではそういった文脈による強制が無い場合だけを考えている。

- 7) 阿部1996はこの現象を指摘した上で、いわゆる「二重ヲ格制約」に関わる現象と統一的に扱うべきだとみなし、結局動詞の持つ格素性の問題であるという仮説によって説明を試みている。
- 8) 原因の使役文については、阿部1997を参照のこと。そこでは二重ヲ格制約違反の回避という振る舞いについても述べられている。
- 9) 但し、引用節を元の文の主語(被使役者)と関連づけるのであれば文法的な文も作れる。例えば、(38b)は、引用節「何かの手がかりにでもと」を「男」の発話・思考としてでなく「私」の発話・思考として解釈するなら、文法的な文となる。しかしそれでは引用節を含む文の使役化という文法操作とは全く別のことになってしまう。
- 10) 語彙的な理由で名詞化ができないケースももちろんある。例えば、「～と言う」は完全に対応する名詞が存在しない。あえて言えば「～との／という言明」といった句が一番近いであろうが、引用内容によっては意味的あるいは文体的に奇妙な句ができてしまう。例えば「??うんそうだよとの／という言明」など。
- 11) (44b) (45b)において引用内容と名詞との間に「との」を入れて「?助けてくれとの絶叫」「?こんなこととしてよいのかとのためらい」とすると容認度が下がるようであるが、これは文体的な理由によるのであろう。すなわち、直接引用的な引用と「との」は共起しにくいようである。

参考文献

阿部 忍 1991「認識動詞構文の構造と格」『待兼山論叢』第25号日本学篇，pp.17-31. (大阪大学文学会)

- 1996 「二重ヲ格制約と日本語の使役構文」『日本学報』15,
pp.65-76. (大阪大学文学部日本学研究室)
- 1997 「原因の使役文に関する覚え書き」『山手国文論攷』18,
pp.29-34. (神戸山手女子短期大学国文学科)
- 柴谷方良 1978 『日本語の分析』大修館書店
- 仁田義雄 1981 『語彙論的統語論』明治書院
- 藤田保幸 1986 「文中引用句『～ト』による『引用』を整理する——
引用論
の前提として——」『論集日本語研究(一)現代編』pp.206-230. 明治書
院
- 1988 「『引用』論の視界」『日本語学』7-9, pp.30-45.
- 益岡隆志 1987 『命題の文法』くろしお出版
- 1997 『複文』くろしお出版
- 益岡隆志・田窪行則 1992 『基礎日本語文法一改訂版一』くろしお出
版
- 森山卓郎 1988 『日本語動詞述語文の研究』明治書院